慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	家事労働の聖職性に関する一考察
Sub Title	A study about the domestic labor as the sacred profession
Author	須長, 史生(Sunaga, Fumio)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1992
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.35 (1992.) ,p.37- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000035-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

家事労働の聖職性に関する一考察

A Study about the Domestic Labor as the Sacred Profession

須　長　史　生*

Fumio Sunaga

It is generally thought that the domestic labor has particular meanings —love, holy— different from the wage labor. In this paper, I named meanings vested in the domestic labor "sacred professional traits", and analyzed them by sacred-profane-play (sei-zoku-yu) theory that is typified by R. Caillois and S. Inoue. It is regarded that the domestic labor belongs to the sacred province, because itis the labor that takes part in the life activities. So the image of the domestic labor controls the house wives' behavior with their respecting their personality themselves.

0. はじめに

一般に我々が家事労働[1]について語る時，賃労働について語る時と決定的に異なるのは，そこに我々が特別の意味を読み込もうとする点である。我々は家事労働を単なる損得勘定で語ることを嫌い，愛情表現で説明しようと欲する。女性が主婦の役割を担うことについても，そこには家族愛が存在していることを強調する傾向が強い。『主婦論争を読む Ⅰ』にはそういった傾向を端的に示す論文が多い。例えば，「主婦という第二職業論」の中で石垣は，女性も現在の地位に甘んずることなく，生産的な仕事に進出するべきであると述べている。

> 腰を浮かして働く女性が多いために，真面目に，職業人として生きようとする少数の女性は大きな損害をこうむっている。けれども現在のところ，働く女性の大多数は，結婚するまで数年の空白を埋めるために，働いて，嫁入りの費用をためるというだけで，すましこんでいるから，職業に生きようとする少数の女性は犠牲にされている。
>
> (石垣，[1955＝1982a]，p. 3)

ところが，これに対し寄せられた反論は，家庭や家事労働の意義の強調，経済の論理優先への非難に終始している。それは性による家事労働の社会的配分を甘受する女性，その結果としての「職業婦人」の犠牲といった主張に対して家庭の価値や主婦の尊さを繰り返すばかりである。

> ……日本では外に出て働き，経済的の権力を握っているものが上にあって，それよりも多分もっと重大な仕事をしているけれども，現金収入を持たない主婦は何か地位の低いものというふうに考えられてきたのでしょう。(中略) そして，精神的の働き，義務責任というものを立派に尽している主婦の功績というものを非常に低く評価していたのですね，……。そういう考え方をまず根底から叩き直して，主婦という一つの重大な任務が，現金収入には評価されなくても，それ以上のものをもっているということを，男女ともに認めなければ困ると思うのです。
>
> (坂西，[1955＝1982a]，p. 16)

ここから読み取ることができるのは論争における両者のずれである。ここでいうずれとは理論的な意見に対して反論をするのではなく，理論を持ち込むことに反発することを指している。石垣は，女性が主婦という社会的に割り当てられた役割に甘んじることを問題視し，女性の意識変革を訴えた。しかし，それに対する批判は石垣の主張にかいま見られる家事労働を軽視するかのような

* 社会学研究科社会学専攻研究生（家族社会学）

視点に集中している。彼らは石垣の問題提起を家事労働，あるいは家庭の尊さへの挑戦と受け止め，家庭の価値を前面に押し出すことによって反論を行っているのだ。これは石垣の主張に対する論理的な「反論」ではなく，むしろ，彼女の認識の姿勢に対する感情的な「反発」ともいえるものである。もちろんこれは 30 年以上前に起こった論争であり，家族を取り巻く環境，女性に対する認識も当然現在とは同じではない。「主婦論争」でも以後，論点は家事労働への学問的用語の適用の試み (1960，磯野論文)，そして「生活人間として」主婦を見直す試み (1972，武田論文) へと移行してきている。その意味では論争をそのまま現代の主婦に対する認識の反映と受け取るのには無理があるだろう。しかしながら，女性のライフスタイルや主婦役割についての論争ではこの種のずれはいまだに根強く，それは現在でも普通にみられる現象である[2]。このようなずれは家事労働を語る時に特に顕著に現れる独特の現象なのではないだろうか。私はこのずれの中に，我々の家事労働のイメージに対する認識の仕方の相違が表れており，それを分析することによって，相違のあり方や，相違が実際の家事労働に与える影響を明らかにすることができると考える。

本稿ではこのずれを中心に扱っていく。ずれを生み出すものは何か。なぜ家事労働を語る時に特にそれが目立つのか。このずれを射程に入れた理論を構築し，更には家事労働の分析に迫りたい。これまでも，家事労働を研究の対象として扱った学問は家族社会学，女性学を中心に存在する。なかでも，マルクス主義の用語を用いて家事労働の分析を行うマルクス主義フェミニズムは，公的領域・私的領域の相互作用の中に家事労働を位置づけ説明している点で最も有効な理論であると考える。しかしながら，それは社会構造的側面により比重をおいた理論であり，家事労働に対する主観的な意味付与，特に家事の感想ではつまらなさを感じていても実際の主婦志向は高いという現象を説明しえない。そこで本稿では，家事労働に対する特別な意味づけを分析するために R. カイヨワの聖一俗一遊の図式を採用し，特に聖と俗に絞って分析を行った。この中で，我々は家事労働にある種の尊さを感じ，その尊さが主婦の行動にさまざまな束縛を行うこと，そして主婦は逆にその束縛に依拠することで主婦のアイデンティティを維持していることが明らかになった。

1.　聖一俗一遊理論

論争の中で，坂西，清水の反論は石垣の「論理」に対してではなく，彼女の家事労働の「解釈の仕方」に対して向けられていた。彼女らの論点は家事労働を論ずるときは，それにふさわしい解釈枠組みが用いられるべきであるという点に絞られているといえよう。そうであるならば論争におけるずれは以下のように理解することができるだろう。双方の論者の主張は，共に家事労働あるいは主婦について論じているのではあるが，それぞれが依拠している解釈枠組みは異なっている。更に論者の関心はそこで用いられている解釈枠組みに集中している。したがって論者にとっては相手の主張の論理的な正当性はさしあたり関心がなく，その論争が自らの解釈枠組みで語られるかどうかが最大の関心事となるだろう。結果として，両者の主張は論点がすれ違い，論争自体はいわば「言いっぱなし」のまま終わるのである。ずれはここから生じている。

同様のずれは，教師や医師，看護婦といった聖職と呼ばれる職業への言及にもみられる[3]。一般に，生命の誕生から終焉まで直接的に生命に携わる職業については世俗的な利害を度外視した言説が主流を占める。それは，禁欲や奉仕，そして慈愛に満ちた神聖なる世界を我々に想起させる。そこでは人の行為は愛情や使命感から説明され，功利的な計算に根ざした主張は（それが功利的であるという理由で）瀆聖感情を引き起こし，強く敵視されるのだ。我々が表明する家事労働の世界もこのような神聖なる領域だといえるのではないだろうか。

1-1.　聖一俗一遊理論の導入

我々の生活する世界は平板な単一の世界ではない[4]。それは我々が意味づけをし分節するリアリティの総合である。井上俊は R. カイヨワにならい，それを聖一俗一遊の三項図式に整理した。家事労働のイメージを分析していく上で，私はこの図式が有効であると考える。なぜならば，いま見てきたように我々の抱く家事労働イメージは，一般の賃労働よりもむしろ聖職のイメージに近く，さらに家事労働の現代的傾向の把握には遊の視点が有効であると考えたからである。

1-2.　聖なる領域

聖なる領域とは，日常世界から隔離された宗教的・神話的意味を持った領域，あるいは同様の圧倒的な力と意味の充溢する領域のことをさす。それは，接する人間を引き付ける強い魅力を有すること，激しい畏怖と崇拝の念を引き起こすこと，あるいはタブーの存在，俗や遊に対して優越的な価値を有することなどによって特徴づけることができる。したがって神聖なるものという性格（聖性）が規範に付与された場合，それは「合理化にあ

たって，実用性，有効性，あるいは理性といったものに頼る必要が」なくなる。その「正当化は神的なるもの，深く伝統的なもの，カリスマ的なものの領域から引き出される」[5] ようになるからだ。

聖性の機能については二つの面から考察ができる。一つは社会の側からの統合に関するものであり，もう一つは個人の側からの自らの行為や存在に意味づけをすることに関わるものである[6]。社会統合的側面からみると，聖性は個人に対し規範への同調を強要し，それと同時に個人の内面に浸透することによって利害打算をこえた服従を獲得している。また聖なる領域は優越的価値を有し，人を惹きつける強い魅力を有する。それゆえ，聖性をもった規範は，個人に自らの人格を尊敬できるような形での同調を要請できるのである。これは個人に自己の行動を統制する内面的な義務を生ぜせしめ，より強固な統合を可能にしている。一方，個人の意味づけの側面からみれば，それは意味づけによって個人のアノミー回避の機能を果たしていることになる。人間は自らの存在や行為に対して自分が生きる社会と関わらせる形で意味づけを行っている。聖性はその意味づけを容易にし，個人を意味喪失の恐怖から救っているのである[7]。

したがって聖なる領域とは，次のように定義を下すことができる。それは圧倒的な力と意味が充溢する日常の世界から隔離された領域のことで，そこにおいては，通用している（宗教的・神話的）意味を理解することが重要視され，社会的事象はその意味にしたがって解釈される。

1-3. 俗なる領域

俗なる領域は我々の日常生活の領域と重なっている。それは我々が常に注意を向けている世界であり，A．シュッツのいう「至高の現実」[8] である。この領域の特徴は経済性，効用を重視した合理主義的価値の貫徹であり，その意味で，伝統的価値規範からの自由と特徴づけることができる[9]。

したがって，俗なる領域で生起するとみなされる事象は，経済性や実用性の観点から判断される。

1-4. 遊なる領域

遊の領域は聖や俗と比べて，シリアスさの程度によって区別される。聖なる領域は神話的意味に対して真面目であった。俗なる領域も生産性に対して真面目であることが要求された。しかしそれらに対して遊なる領域では，どちらに対しても「不真面目」であることが可能である[10]。遊なる領域は虚構すなわち日常生活と対比した場合，二次的な現実であるという意識を伴っている。直接的には実生活に影響を及ぼさないという意識が，そこに接する人間の態度に不真面目さを許容するのだ。遊なる領域の典型的な特徴である現実の拘束からの離脱，不真面目さの許容は聖と俗の二項図式に有効な視点を提供する。聖の「理想主義的厳粛主義」（井上俊）と俗の「現実主義的功利主義」は均衡と抑制の関係にあり，相互に対立し合ってはいる。しかしながら，両者はともに真面目さの点で共通している。それに対し遊なる領域の本質は拘束からの離脱そして不真面目さの許容である。そうであるがゆえに聖―俗を貫く真面目さを相対化することが可能となる。この視点が聖と俗の「なれあい」を見抜く。合理的で理想にもかなった主張がしばしば聖性を帯び教条と堕していくこととその抑圧性[11]を見破ることができるのは，理想や現実とは距離をおいた遊の視点である。遊なる領域は不真面目さによって聖―俗の軸をずらすという機能を有するのだ。ここでは遊なる領域を，実際の生活に対して影響力が直接的には及ばない領域と定義づける。遊なる領域では現実の拘束からの離脱が容易である。それゆえ「正しいもの」「真面目なもの」「権威のあるもの」に対してそれらを相対化し，権威を剝奪し，批判する力を有している。

1-5. 三者の関係

聖―俗―遊の三つの領域は相対的な世界であり，それらは他の二者との対比によってこそ意味を持つ。これら三つの領域は我々の現実世界を豊かにし，そして複雑なものにする。

これらの三極は別個の世界ではなく連続しており，いわば三極を頂点とした三角形を形成している[12]。さまざまなもの，時間，行為はこれらのなかに位置づけられる。例えば，聖の極点には神，俗の極点（近く）には実業家，遊の極点（近く）には道楽者，そしてそれらの間に僧侶やサラリーマン，芸能人らが位置づけられる。我々は社会的事象をその性質や全体の文脈との関係から三つの領域（聖・俗・遊）のどれに属する事柄であるかを判断し，それぞれの領域を論ずるにふさわしい，用語，価値観，解釈枠組みを採用していると考えられる。それぞれの領域に典型的な，もの，時間，行為はそれらの解釈枠組みと直接的に結びつくが，中間領域に位置づけられるものは，より強く意識される側面の解釈枠組みを採用している。この図式のなかでは教師（教育）や主婦（家事労働）は聖に近い俗の領域に位置づけることができる。それらは，基本的にどちらの領域の解釈枠組みを用いて語ることも可能ではあるが，我々は多くの場合，聖なる領域の解釈枠組みを用いる。

ここで，家事労働について語るときの論争の質について思い出すならば，そこに生じていた意見のずれはそのまま家事労働という労働への解釈枠組みの相違の反映であったということに気が付く。我々の認識のなかには家事労働をある種，聖なるものとみなす感覚が存在しているといえるのではないだろうか。そうであるがゆえに，主婦や家事労働についての論理を重視した分析は，反論ではなく，反発を呼んだのである。

2. 家事労働イメージ

家事労働とはある意味では家庭におけるあらゆるサービス労働であるので，それが指し示すものは多様である。それゆえ対象となる労働の取り上げ方一つで，それについての感想も著しく異なってくる[13]。しかしながら，家事労働を語るときに我々が抱くイメージはかなりの部分まで統一されたものではないだろうか。『主婦論争を読む Ⅰ・Ⅱ』をはじめとして，主婦や家事労働について表明される言葉[14]の背後には，統一的な主婦や家事労働のイメージが浮かび上がってくる。またその語られる様式にも独特の特徴がみられる。先にも見た通り，家事労働イメージの特徴は教師，看護婦のように聖職と呼ばれる労働のイメージと類似している。家事労働は聖なるの領域に属することがらであり，家事労働のイメージに含まれる意味は聖職性として把握することができるのだ。ここでは我々が抱く家事労働の観念に含まれる聖職性イメージを明らかにしていく。

2-1. 家事労働のイメージ

我々が家事労働について語るとき，その背景となる家事労働のイメージには一般の賃労働にはない特別な意味が含まれていると考えられている。家事労働や親子関係についての投書を扱った『子ども』(朝日新聞社 [1990]) には「ふつうの人々」の家事労働や主婦に対する考えが表明されており，背景となる家事労働イメージがいくつか特徴的に示されている。もちろんこれは「朝日新聞」への「投書」であり，編集段階での選択をも考えるならば，これをもって全体の家事労働イメージを代表させることは困難である。しかし現代社会において，投書をした人たちに，彼ら独自の家族倫理や職業倫理，あるいは特別な学問的背景を有していないとするならば，その言説が依拠する根拠は，彼らが社会的に通用していると信じていて，それを支持している一般的イメージであるとみなすことができるだろう。それゆえ，資料としても限定的ではあるが，有効であると考える。それらをまとめると次のようになる。生命に携わる（生命），お金のためではなく愛情のために働く（動機の純粋性・自発性），自分よりも家族の利益を優先する（奉仕・禁欲），家族の愛情によって報われる（精神的報酬）。家事労働にはこのような観念がついてまわり，「家事労働は一般の賃労働とは違ったものである」と我々に強調させるのである[15]。家事労働は直接的には賃金が支払われない。社会を支える生産的労働とは目に見えるかたちではつながっていない。その結果として家庭領域に閉じ込められている主婦は自らの存在意義が喪失せられる危機におそわれかねない。その危機を救っているのが聖職性なのである。(家事労働は生命を育む尊い仕事である。したがってそれはお金のために働く賃労働と違い，動機は家族への愛情である。またそれは失敗の許されない労働であるから生はんかな気持ちで接してはいけない。主婦は女性にとっての天職だ……。)

これらの観念が一体となり，聖職性を形作り，家事労働者に他に優越する形で意味を与えるのである。家事労働イメージ（聖職性）は生命，奉仕，禁欲，精神的報酬がセットとなって形成されている。どれかが欠けても聖性を汚すことすなわち自らの否定につながる。主婦は自らの存在を維持するために聖職性を守るべく行動するのだ。無償で男性と資本に奉仕する家事労働[16]の自発性はこのようにして調達されるのである。

家事労働の聖職性に関しては更にもう一つの特徴が付け加わる。それは家事労働の聖職性が産む性と結び付いている点である。家事労働に関するイメージは決して性に無関与な形では形成されない。それは必ず妻・母親（＝女性）と結び付いている。賃労働にはない尊い意味の付与された家事労働は当然のように女性に割り当てられている。それを正当化する論理として，ネガティブな理由としては労働市場の不平等性が，そしてポジティブな理由としては母性神話が用いられる。母性神話の本質は産む性としての女性の強調と母子の情動的結び付きの強調である[17]。土偶や地母神信仰などのように我々の社会では，産む性自体に聖性を認める傾向があった[18]。母性神話は両者（産む性と生命に携わる労働）を結び付ける形でストーリーを形成し，家庭における性別役割分業の積極的な根拠となったのである。これは労働市場から排除された女性を家事労働に結び付けるのを正当化する働きをした。

この家事労働が聖職性を帯びる根拠は，それが生命に携わる労働であるという点である。生命の一回性は近代になってから強く認識されるようになった概念である。それにしたがって，我々は生命を失うことを強く恐れ，

生命をよりよく育むこと（教育・人格形成）に関心を集中させるようになった[19]。特に特定の宗教的影響力の少ない日本においては聖なるものの感覚は生命・人格に集中する傾向は強いのではないだろうか。

それゆえ，生命に携わる領域は聖なる領域として強く意識され，本来の聖職（僧侶）だけでなく，医師，教師と並び，家事労働者も我々の観念のなかで聖職性を帯びるのである。

2-2. 家事労働における聖職性の現代化

家事労働の聖職性は歴史的な概念である。生命の一回性の認識や背景となる母性神話などその要素の多くが近代に特徴的な内容であることを考慮にいれると，現在あるような形での家事労働の聖職性は近代家族を反映したものといえるだろう。しかし現代の家族は近代家族の形態から変化しつつある。家事労働の聖職性は，このような家族の現代的な変化のなかでどのような変容を遂げているのだろうか。

家族社会学で論じられる家族の現代的な特徴は多岐にわたるが，それらをまとめると次の四点を指摘できる。すなわち制度的側面の弱体化（事実婚，婚外子の増加，集団としての家族に対する個人の優先），旧習からの離脱（性別役割分業の弱体化，女性の労働力参加，家事労働の外部化），家族機能の縮小（情緒的機能への特化），女性の身体の変化（少産傾向，ライフサイクル第Ⅲ期の発生）である。これらのうち，例えば性別役割分業観の弱体化は，女性と家事労働の無批判な接合に留保をつけるだろう。旧来の分業の維持は何らかの説明を必要とすることとなり，その分女性に対する家庭への拘束が緩くなるだろう。また家事労働の外部化・縮小は家事労働を軽減するだけではなく，家事労働の一部と外部の市場サービスとの間の交換可能性をも意識させるだろう。これは家事労働が語られる領域の正当性の存立基盤が弱まることにつながる。なぜならば家事労働の交換可能性は家事労働を功利的文脈で語ることを容易にし，「お金があれば（家事労働を）やらなくて済む」という感覚を生じさせる[30]からだ。これは自発性や動機の純粋性を損ねることにつながる。

しかしながら，結論としては家事労働に付与された聖職性は現在のところ，消失することはないと考える。なぜならば，生命に携わる仕事に対する尊さや豊かさの感情を否定するような言説はみられないからである。これは家事労働への聖職性の意味付与の根拠が崩壊していないことを示している。逆に，家事労働の聖職性がより強まったことを示す傾向はいくつか見られる。例えば，家族の制度的側面の弱体化は家族が個人の幸福追求の場としての側面を明確化してきたことを現しているとみることができるだろう。情緒機能への特化もしかり。出生率の低下は出産・育児が行える環境をより高い水準に設定し，それが達成されるまでは産まないという子産み子育てにより専念しようとする強化された子ども中心主義のあらわれと捉えられる[21]。近代家族の変容と現代的特徴の現出は家事労働の聖職性を喪失させてはいない。むしろ聖職性を新たな形で編成し，強化しているのだ。

家事労働の現代的編成の本質は，生命や人格の育成に影響を及ぼすか否かを基準とした家事労働の聖的部分（中核部分）と俗的部分（周辺部分）への分化，そして聖的部分への関心の集中である。聖的部分とは生命の育成に関わること，特に子供の人格形成に関わる領域を指す。現代の我々の社会において家事労働の手抜きが直接的に生命を左右することは考えられにくいが家族の愛情の欠如や，教育の失敗が子供の人格形成に悪影響を及ぼすという考え方は比較的受け入れられやすい。つまり，子供の人格形成に関してはいまだに不安定で，そこでの失敗は取り返しのつかないことにつながるという意識が存在しているのだ。家事労働の聖職性はそこへ凝縮されていくだろう。そしてますます情緒的側面を強めていくだろう。一方，洗濯，掃除といった人格育成とは直接関係がない，それゆえ周辺的である家事労働は，伸張する効率，実用の観点からみられ，合理化，外部化がすすむ。家族はそこで時間やお金を節約し，その資源を集中的に中核部分に投入する。その結果，家事労働の中核部分はより密度が濃くなり，周辺部分は認識において俗なる領域に近づいていく。

3. 聖—俗—遊理論の可能性（まとめにかえて）

家事労働に対する主婦の意識にはある種の分裂があるといわれている[22]。主婦は，家事労働の感想として「くだらない，おもしろくない」といった否定的評価を下すのだが，一方主婦の役割に対しては志向性が高い。つまり，一方では家事がつまらないと答えながら，もう一方では主婦に生きがいを感じていることになる。

これは次なように解釈できる。家事労働の感想は労働の内容（ルーティン），時間（きりがない），報酬（無償）に対して向けられており，いわば俗なる領域での解釈枠組みを用いたものとなっている。一方主婦役割については「『主婦であること』にまつわる観念と，女としての心理的アイデンティティとの関係」[23]について語られる。

そこでは聖なる領域での解釈枠組みが用いられている。おそらく，どちらも女性にとっては真実であろう。しかし，主婦は自らが依拠する聖なる領域の要請を受け入れることでアイデンティティを維持している。聖なる領域の要請として世俗次元の解釈は排除され，感想は「言うべきではない言葉」としていわばオフ・レコ扱いという形で表明される。俗次元での抑圧は聖なる領域の解釈枠組みによって隠蔽され，結果として現在の家事労働の形態が再生産されることにつながっている。

フェミニズム理論や，人権論はこの抑圧性と聖職性による呪縛に気が付いていた。聖俗遊の図式からするとこれらは，家事労働を徹底的に俗なる次元から解釈すること，すなわち聖職性を否定しつくすことで呪縛から解放しようとする試みと解釈できる。しかし，これは当の主婦の反発を招いた。実際，女性が男性と全く同じように仕事で自己実現することが困難な状況のなかで，唯一依拠していた聖なる領域を攻撃することになってしまっていたからだ。また，理論的な評価という点からも，女性の主婦志向性，主婦の自発性の説明が十分にはなされなかった点で問題が残る。聖と俗がしばしば「なれあう」ことを考えると，俗次元からの聖なるものの分析は新たなるより強固な聖性[24]をつくり上げ，タブーとして分析の対象から外れていってしまう危険性を併せ持つ。

P.L.バーガーが言うように意味の喪失が人間にとっての最大の恐怖[25]であるならば，太古から存在してきた聖なるものは今後とも形を変えながら存在し続けていくだろう。そうであるならば，家事労働の聖職性を捉えるときに必要になってくるのは，それを否定することではなくて聖職性から性差別的要素を抜きさること，そして聖なるものを常に相対化しうる視点を確保することなのではないだろうか。離脱を基調とする遊は聖，俗双方に共通する堅苦しさ，胡散臭さを見抜く視点を提供する。前者についてはすでに母性研究を中心に多くの取り組みがみられる。後者については特に聖なるものの視点と俗なるものの視点を持っても見えてこない事柄を分析の領野へ引き出すことが重要であり，それには遊なる領域の理論化が有効ではないかと考えられる。

近年注目を集めている生活クラブ生協の活動[26]はオルターナティブな運動に数多くの示唆を与えたのだが，聖―俗―遊理論に対しても同様に示唆的である。生活クラブ神奈川が「実体験」の「語り継ぎ」の「記録」として出版した『ねえ きいて きいて』(生活クラブ神奈川，[1989]) には，安全な食品を買いたいという「軽い気持ち」から参加した生活クラブの活動に楽しみを見出し，次第に没頭し，家庭との折り合いをつけていこうとする主婦の心情が綴られている。そこには，これまでの働く主婦にみられた聖なる領域と俗なる領域との葛藤・調整ではなく，いわば聖なる領域と遊なる領域との葛藤・調整がみてとれる。生活クラブに集う主婦は，その多くは活動によって日々の生活の糧を得ているわけではない。よりよい「消費材」(商品) を購入して生活の助けにしようとしてそこへ参加している。しかし，「消費材」は必ずしも安くはなく，スーパーで買う方が効率的であることはよく指摘されている。また生活クラブへの参加も脱退も原則的に自由である。このように，生活クラブに集う主婦の姿は，聖，俗どちらもなじまない。むしろ二次的現実という意味での虚構性は遊的な要素を強く示す。主婦役割の延長のつもりで参加したはずの主婦は，生活クラブに関わっていくうちに，その活動にやりがいや楽しさを見出し，ついには「すまない」と思いつつも，主婦役割を縮小していく。いわば遊による聖の調整である。これは従来の働く主婦の主婦役割の縮小とは，聖との対立項において決定的な相違を示す。働く主婦の主婦役割の縮小は，家族にお金を入れるため，あるいは社会人としての自己実現によって説明されてきた。しかし，生活クラブの主婦は，自分自身のため，自らの楽しみ (遊) のために主婦役割を縮小している。その意味で，彼女らの行動はより聖なる領域から離れたものとなっている。主婦役割を否定するつもりはないにも関わらず。遊なる領域の伸張は，聖なるものの観念をより相対化することになるだろう。自らの (遊的な) 楽しみのために，家事労働 (それも聖職性の中核部分である育児) を犠牲にすることは働く女性の葛藤には見られなかった現象である。他にも，パート就労する主婦の充実感[27]や，「女縁」[28]など，遊なるものを理論化することによって見えてくる現象は少なくない。

遊戯の裏に隠された，遊の精神に秘められた意味を解読し，積極的に取り上げていくことが今後ますます重要になってくると思われる。

註

1) ここでは，家事労働を家族のなかで行われる無償の有用労働と定義づける。
2) 近年のものでも同様のずれはみられる。『こども』(朝日新聞社テーマ談話室，[1990]) 参照。
3) 例えば，教職という職業の意味づけをめぐって展開された論争は，教師＝聖職，教師＝労働者，教師＝専門職と進んでいったが，ここにも同様のずれを認めることができる。教師の労働者性を強調

して労働運動への階級的結集を呼びかける教師＝労働者論は，文化伝承，人格形成といった教育という労働の質を強調する論理によって批判された。教師＝聖職論については熊谷，[1973]，坂本，[1989]，名越，[1984] を参照。

4) 江原，[1985]，pp. 12-13 参照。
5) Nisbet, R. A., [1970＝1977]，訳（第三巻）p. 35。
6) Nisbet, R. A., 前掲書，p. 42。
7) R. A. ニスベットは人間の意味への執着の根拠として「人生の不確定性」「人間の心が必ず持っている疎外」「あらゆる人間にみられる，依存の感覚」を挙げる。
8) Schutz, A., [1962＝1985] 参照。
9) T. F. オディは世俗化の特徴として，非神聖化（精神的感動を込めた態度を控えること）と思想の合理化（感情から自由になって認識しようとする態度，情緒に対する論理の重視）を指摘している。O'Dea, T. F., [1966＝1968]，訳 p. 142 参照。
10) R. カイヨワは「遊びの基本的な定義」として①自由②隔離③未確定④非生産性⑤規則性⑥虚構の六つを挙げている。Caillois, R., [1958＝1973]，pp. 39-40 訳参照。
11) 井上，藤村とも「なれあい」の弊害を説いている。「いわゆる進歩的文化人や労働貴族，労組のエスタブリシュメント化，さらには現在の議会制民主主義のあり方にいたるまで，数え上げればきりがない。」（井上，[1977]，p. 166），「『俗』の実利性や『聖』のまじめさがつくりだす非人間性……」（藤村，[1990]，p. 8）参照。
12) 位置づけの考え方は木村，[1981＝1983] を参考にしている。ただし木村は聖―俗―遊に乱を付け加えた四元論を展開。
13) 家事労働の感想については，Oakley, A., [1974a＝1980]，直井，[1989] 参照。
14) ここでは，『こども』（朝日新聞社テーマ談話室，[1990]）を主に参考にしている。
15) 逆に家事労働の感想については，退屈，つまらないといった消極的なものも見られる。しかしこれらは実際の家事労働に対する感想であり，我々が抱く家事労働のイメージとは異なる。しかし両者は全く無縁ではない。その関係性については3章参照。
16) マルクス主義フェミニズムは，家事労働は家庭領域の出来事ではあるが，そのあり様は市場（資本制）と家庭（家父長制）の相互作用によって決定され，資本制と家父長制の存続にとっての不可欠な存在となっていることを見抜いた。マルクス主義フェミニズムについては Sokoloff, N. J., [1980＝1987]，上野，[1986＝1988]，[1990] 参照。
17) Oakley, A., [1974b＝1986]，訳 p. 150。なお，蛯橋・堤 [1992]，大日向 [1992] も参照。
18) 橋本，[1976] 参照。
19) Aries, Ph., [1975＝1983] 参照。
20) 山田，[1989]，p. 154。
21) その意味で，DINKS の出現は藤村，[1990] の言うような生殖家族の拒否（p. 12）を必ずしも意味しない。
22) Oakley, A., [1974a＝1980]，岩田，[1989] 参照。
23) Oakley, A., 前掲書，p. 210 参照。
24) 現代化された聖職性は聖と俗（近代的な価値観）との「なれあい」の産物であった。
25) Berger, P. L., [1967＝1979]，訳 p. 33 参照。
26) 生活クラブ生協の社会学的研究については佐藤（編著），[1988] を参照。
27) 神奈川県婦人総合センター，[1990] によると，就労する主婦の仕事の充実感の第一位は，フルタイム，パートともに自己実現でも，生きがいでもなく「人とのつながりが広がる」であった。同様の傾向を示すものとして旭化成・共働き研究所，[1990] を参照。
28) 上野，[1988] 参照。

主要参考文献

Aries, Ph., [1960] "L'Enfant et al vie familiale sous l'Ancien Regime,"＝[1980]『〈子供〉の誕生：アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信/杉山恵美子（訳） みすず書房.

――, [1975] "Essais sur l'historie de la mort en Occident du money age a nos jours,"＝[1983]『死と歴史：西欧中世から現代へ』伊藤 晃/成瀬駒男（訳） みすず書房.

旭化成・共働き家族研究所，[1990] 『東京・ニューヨーク・ロンドン共働き家族の生活比較調査：調査報告書』.

朝日新聞テーマ談話室（編），[1990] 『こども』朝日新聞社.

Berger, P. L., [1967] "The Sacred Canopy",＝[1979]『聖なる天蓋：神聖世界の社会学』薗田 稔（訳） 新曜社.

Caillois, R., [1967] "Les Jeux et les Hommes",＝[1973]『遊びと人間』多田道太郎/城塚幹夫（訳） 講談社文庫.

江原由美子，[1985] 『生活世界の社会学』勁草書房

藤村正之，[1990] 「青年文化の価値空間の位相；聖・俗・遊その後」高橋/藤村（編）[1990].

蛯橋恵子・堤マサエ，[1992] 『母性の社会学』サイエンス社.

Genevie, L./Margolies, E., [1987] "The Motherhood Report,"＝[1989] 『母親！』江原由美子他（訳） 朝日新聞社.

Hartmann, H., [1976] "Capitalism, Patriarchy and Job Segregation by Sex, "Monthly Review Press, [1979].

――, [1979] "Unhappy Marrige of Marxism and Feminism," Capital & Class, No. 8＝[1987]「マルクス主義とフェミニズムの不幸な結婚」,『経

済労働研究 第七集』.
橋本峰雄, [1976] 『性の神』淡交社.
市川昭午 (編), [1987] 『教師＝専門職論の再検討』教育門発研究所.
井上 俊, [1977] 『遊びの社会学』世界思想社.
石垣綾子, [1955] 「主婦という第二職業論」上野 (編) [1982a].
磯野富士子, [1960] 「婦人解放論の混迷: 婦人週間にあたっての提言」上野 (編) [1982b].
岩田知子, [1989] 「主婦としての意識と家事観」, 直井 (編著) [1989].
神奈川県婦人総合センター, [1990] 『女性の子育て事情: 家庭機能 (養育) の実態・意識・ニーズ調査報告書』.
厚生省人口問題研究所, [1987] 『独身者の結婚観に関する全国調査』.
熊谷一乗, [1973] 「教員政策と教師観」, 『教育社会学研究 第28集: 日本の教師』日本教育社会学会(編) 東洋館出版.
名越清家, [1984] 「教職観と現代教師の役割」近藤大生/有本 章 (編著) [1984].
————, [1987] 「教職の専門職化をめぐる意識と実態」, 市川 (編) [1987].
直井道子 (編著), [1989] 『家事の社会学』サイエンス社.
Nisbet, R. A., [1970] "The Social Bond: An Introduction to the Study of Society,"＝[1977] 『現代社会学入門 (三)』南博 (訳) 講談社学術文庫.
Oakley, A., [1974b] "Housewife",＝[1986] 『主婦の誕生』岡島茅花 (訳) 三省堂.
————, [1974a] "The Sociology of Housework,"＝[1980] 『家事の社会学』佐藤和枝/渡辺 潤 (訳) 松籟社.
O'Dea, T. F., [1966] "The Sociology of Religion",＝[1968] 『現代社会学入門 5: 宗教社会学』宗像巌 (訳) 至誠堂.
大日向雅美, [1992] 『母性は女の勲章ですか?: 子どものいない女性たちの訴え 操作される母性の実証的解明』産経新聞社.
坂本秀夫, [1989] 『教師の研究』三一書房.
坂西志保, [1955] 「『主婦第二職業論』の盲点」, 上野 (編) [1982a].
佐藤慶幸 (編著), [1988] 『女性たちの生活ネットワーク: 生活クラブに集う人びと』文眞堂.
Schutz, A., [1962] "Collected Papers 1,"＝[1985] 『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題[II]』渡部 光・那須 壽・西原和久(訳) マルジュ社.
生活クラブ神奈川, [1989] 『ねえ きいてきいて: 生活者トーク』生活クラブ神奈川.
清水慶子, [1955] 「主婦の時代は始まった」上野 (編) [1982a].
Sokoloff, N. J., [1980] "Between Love and Mone",＝[1987] 『お金と愛情の間』江原由美子他(訳) 勁草書房.
高橋勇悦/藤村正之 (編), [1990] 『青年文化の聖・俗・遊; 生さられる意味空間の谷容』恒星社厚生閣.
武田京子, [1972] 「主婦こそ解放された人間像」上野 (編) [1982b].
上野千鶴子, [1986—1988] 「マルクス主義フェミニズム」, 『思想の科学』.
————, [1986b] 「聖・俗・遊 (R. カイヨワ)」, 『命題コレクション 社会学』作田啓一・井上 俊(編) 筑摩書房.
————, [1990] 『家父長制と資本制: マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店.
上野千鶴子 (編), [1982a] 『主婦論争を読むI』勁草書房.
————, [1982b] 『主婦論争を読むII』勁草書房.
上野千鶴子・電通ネットワーク研究会, [1988] 『「女縁」が世の中を変える』日本経済新聞社.
山田昌弘, [1987] 「近代家族形成における「情緒」の二つの意味」, 『現代社会学24』アカデミア出版会.
————, [1989] 「家事労働の行方」, 『季刊・社会保障研究 Vol. 25 No. 2』.
山田昌弘/瀬地山角, [1988] 「性役割分業隠蔽のメカニズム: 大学生の性役割意識調査から」, 『家族研究年報 No. 14』.